

『狩と漂泊 裸の大地 第一部』(角幡唯介著)

20年ほど前に『空白の5マイル〜チベット、世界最大のツァンポー溪谷に挑む』で開高健、大宅壮一両ノンフィクション賞を受賞して一気に探検作家の寵児に躍り出た本書の著者は、その後舞台を北極に移して19世紀のフランクリン北極探検隊129名全員が遭難死した探検の足跡を辿った冒険譚『アグルーカの行方』や太陽が一日中昇らない極夜の北極圏を3ヶ月間に亘って橇犬の相棒と2人だけで探検し続けたドキュメンタリー『極夜行』を出版した以降は探検のネタが無くなったのか或いは探検精神が燃え尽きてしまったのか、鳴かず飛ばずの状態になり、手に入れた山の神とノウノウと新婚生活に浸り子供も出来、文士好みの定番鎌倉に買った一戸建てマイホームのサンルームで高級ワインでも飲みながらノタノタ・ノウノウと、読者にとってはどうでもよくてアホらしいだけの彼の結婚観や人生観の蘊蓄、探検譚大風呂敷などを拵げて売文稼業に励んだ挙句『そこにある山〜結婚と冒険』などというケチな本で騙されるのがオチであろうと高を括って、彼の著書なども忘却の彼方に飛んでしまっていた。



という訳で、角幡唯介という著者の名前もすっかり忘却の彼方になっていたが、たまたま近所の本屋を覗いていた折に、この本が目に入った。橇を引く相棒の犬がうっとり眼を閉じて物思い(?)に耽っているカバー写真や、“一人と一匹にいったい何が起こったか”という思わせぶりな腰巻キャッチコピーに騙されて買ってしまったが、今度の本はなかなかどうして、予想に反して色々と考えさせられる本だったので、改めて紹介したい。この本は著者によれば、中年に差し掛かって探検の経験と知識と気力は最高潮に達したが逆に体力の方が効かなくなってきた、精神と肉体のギャップの焦燥に焦った中年の探検家が今迄何回も歩いた北極をベースにして“狩をしながら長期に漂泊した”1,000km75日間の橇移動漂泊の実態を基に、探検家としての著者が従来の極地探検の概念を大きく飛び越えた新境地である極地狩猟漂泊旅行という概念を編み出すに至った記録である。“狩猟漂泊”となっているが、スポーツ・ハンティングや生業としての狩猟のために北極を歩き廻るということではなく、気の向くままに飄々として、腹が減ったら狩をして漂泊の旅を続けることを意味するらしい。

話が少々ややこしくなったが、筆者も最初は、狩や漂泊が探検とどう絡んでいるのか?、狩がどうした?、狩と漂泊がどう関係しているのか?等々ということがサッパリ掴めず、またまた探検論の理屈を穿り出して上塗りしただけの机上の空論かとガッカリして一旦は本を投げだしたのだが、何やら行間に漂っているモノが気に掛かってページを戻ったり進んだりしているうちにこれは何やらタダモノではなさそうだと思い直した。

巻頭では、「裸の山」という一項があって、事前に目的とする山の地形、難易度、ルート状況、天候、先人の登高記録など調べられるだけ綿密に調べ上げて、山中の行動も行動予定表と寸分の狂いもなく実行するという登山ルールの常識を一旦棚上げし、登頂する山も決めずルートも決めず日程も決めず、その時々目の前の自然状況や自分の気分が赴くままに山を楽しむといういわば行き当たりばったり

の登山スタイルを推奨した項がある。登頂至上主義である前者は、登頂を如何に効率的に実行するかが要諦であり、そのためには地形図やトポやルート写真や登高記録などの他人が作った情報を積み上げて作られた“ガイドブック”どおりに登山する「マニュアル登山」となり、一見効率的ではあるがその結果登山に本来存在していた自由や創造性が失われる結果となる。著者はこの方式を「一方向・直線的な登山の行動原理」と呼び、いつの頃からかこのような登り方に疑問を感じるようになったと言う。

一方、後者の場合は、人気も無く山道も無い完全無垢な原始境を、溪流釣りなどで食料を現地調達しながら気儘にどっぷりと自然に浸るというもので、事前の計画的な管理による行動原理から解放されて気分の赴くままに行動し、どこか思っても見なかった所に行き着くというスタイルで、著者はこの方式を「漂泊登山」と呼んでいる。こちらは登山界の暗黙のルールから解放されていて、その分自由で創造性が高いが逆にリスクが大きく、社会からは遭難必至の登山として排除されるスタイルであろう。

著者は試しにこの漂泊登山をまずは国内で実行してみた。地理院の地形図を全国隅々までチェックして、南会津白戸川流域の只見の山々が日本で最も集落や登山道が無い秘境山域であることを知り、遡行図も持たず事前調査も一切せずに魚を釣りながら漂泊したが、悲しいことに僅か10日間で里に出てしまったと言う。漂泊するには山域が狭過ぎたのだそう。

次に、北海道日高山脈で地図なし登山を行なった。著者はそれまで日高山脈には足を踏み入れたこともなく地図も見たこともなく、山名や地名も聞いたことが無い全くの白紙の地域であった。できるだけ事前情報に冒されないように地図さえ持たなかったそう。地図を持つか持たないかでは生と死くらいの違いがあり、そのために苦境とノイローゼに陥ったことが何回もあったそうだが、逆に、峻嶒で絶悪という日高が日高であるところの本質がまさに現実的存在としての山になり、地図に冒されていない裸の山と対峙することが出来たという。

この国内での漂泊登山を北極で試みた橇旅の記録が本書である。著者によれば、狩による食糧補給に頼りつつ歩いた今回の旅は、前年の極夜探検行を遥かに上回る苦しい旅であったそうだが、腰巻のキャッチコピーでは「この旅で私は変わってしまった。覚醒し、物の見方が一変し、私の人格は焼き焦がれるように変状した」という些かオーバーな表現になっているが、一体著者の何がどう変わったのか？

ここから先は、本書で述べられている「裸の大地」論の核心であるから、小生如き輩がシャシャリ出る幕ではない。「裸の大地」がいかなるモノであるか、騙されたと思って本書を繙いて欲しい。

角幡唯介著『狩と漂泊 裸の大地 第一部』 2022年3月 集英社発行 本体1,800円

(酎 2023年2月 記)